

文部科学省と国立大学附置研究所・センター 個別定例ランチミーティング

第137回 北海道大学 スラブ・ユーラシア研究センター (2025.12.12)



12:05 – 12:10(5分) : スラブ・ユーラシア研究センターの概要
長縄宣博 センター長

12:10 – 12:25(15分) : ヨーロッパ帝国による遊牧民の強制近代化とその帰結
——遊牧民の主体性の再評価 (1920～1930年代)
ベクトウルスノフ・ミラン 特任助教

12:25 – 12:45(20分) : 質疑応答

第4期におけるセンターの方向性

創設70周年を迎えたスラブ研は、国内唯一、アジアでトップ、世界でも屈指のスラブ・ユーラシア地域に関する総合的な研究拠点。

1. 共同利用・共同研究拠点として世界水準の研究を推進

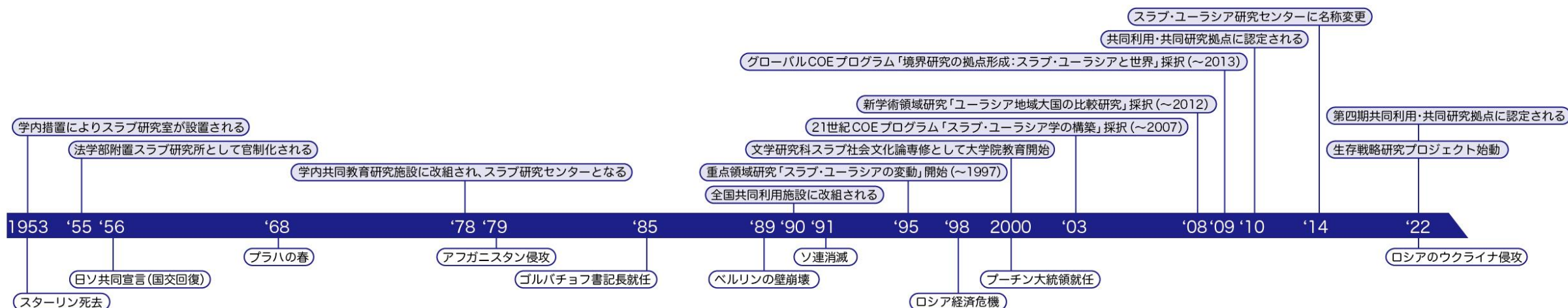
第4期はウクライナ戦争と同時進行。国内外の研究者と連携して国際秩序や地政学的リスクを即応的に分析・解説。**令和4年度から教育研究組織改革分（組織整備）を得て生存戦略研究を遂行。**共同利用・共同研究を通じて地域比較・横断研究、そして理系など異分野との連携にも注力。

2. 若手研究者のキャリア形成を持続的に支援

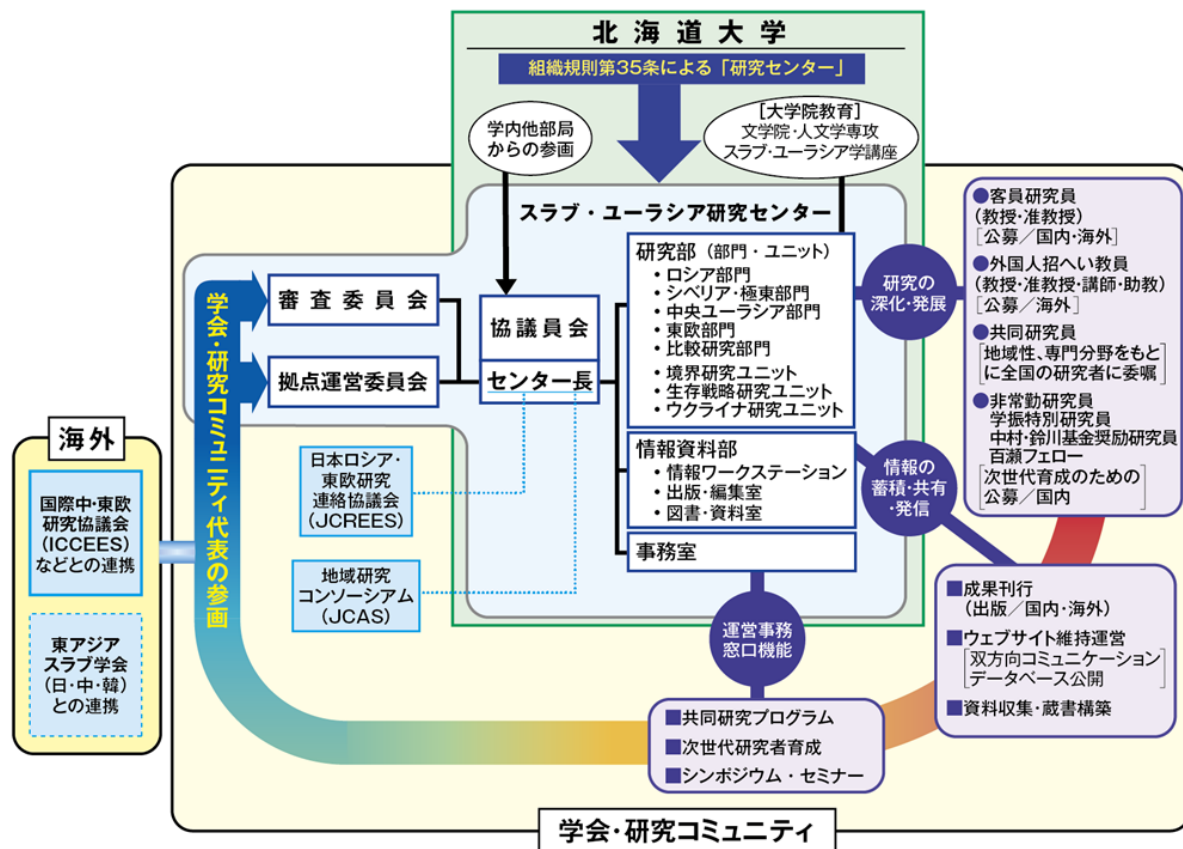
北大文学院で講座を開くほか、全国の大学からの公募で若手を競わせつつ、就職までの道りを切れ目なく支援。次世代養成を国際的にも展開。

3. 国内外の大学や研究所、産業界等との組織的な連携

研究成果の社会実装等の応用研究も推進し、外交・国際協力などに関わる政策提言や、観光業などとの産学連携など、国内外の課題解決を先導するための体制を構築。研究ネットワーク JAPAN（JIBSN）は、国境・境界地域の振興を支え、境界研究に関わる実務者との実社会共創に努める。



スラブ研の構造とスタッフ



・境界研究ユニット (H25年設立)

境界研究を主導し、境界問題を研究する人材を育成することを目的として設置 (グローバルCOE「境界研究の拠点形成」の後継)

・生存戦略研究ユニット (R4年設立)

R3年度共通政策課題分 (共同利用・共同研究拠点の強化) による「国際的な生存戦略研究プラットフォームの構築」推進を目的として設置

・ウクライナ研究ユニット (R5年設立)

北海道大学における「各部局の強み・特色」を促進するスタートアップの事業として設置

専任研究員

ロシア部門	服部 倫卓	ロシア・ウクライナ・ベラルーシを中心とした旧ソ連諸国の経済・政治情勢
	青島 陽子	中東欧・ロシア近現代、ロシア帝国統治構造
	安達 大輔	文学、表象・身体・メディア、18世紀から現代にいたるロシアの言語文化
シベリア・極東部門	ウルフ・ディビッド	近・現代ロシア史、シベリア極東史、冷戦史、北東アジア地域研究、国際政治
	岩下 明裕	ロシア外交、東北アジア地域研究、境界研究
中央ユーラシア部門	宇山 智彦	中央アジア近代史・現代政治、比較帝国史
	長縄 宣博	中央ユーラシア近現代史、ロシア・イスラーム研究、ロシア・中東関係史
東欧部門	諫早 庸一	中央ユーラシア前近代史、モンゴル帝国史、科学史
	仙石 学	比較政治経済、中東欧の福祉政治
地域比較部門	野町 素己	言語学、スラブ語学
助教	岡部 克哉	人文・社会、国際関係論、日露関係史
特任助教	ベクトゥルスノフ・ミラン	クルグズスタン現代史、ソ連中央アジア史
	ダツェンコ・イーホル	ウクライナ語史、歴史社会言語学、東スラヴ諸言語標準語形成
情報資料部	兔内 勇津流	ロシア史、図書館情報学
	田宮 彩也香	リサーチ・アドミニストレーター (URA)

2025年度外国人研究員

Nicola Di Cosmo (プリンストン高等研究所、歴史学)

Una Aleksandra Bērziņa-Čerenkova

(リガ・ストラディンズ大学、政治学)

Edin Hajdarpasic (ロヨラ大学シカゴ、歴史学)

Samuel John Hirst (ビルケント大学、歴史学)

Julie Anne Cassiday (ウィリアムズ大学、文化学)

Olena Palko (バーゼル大学、歴史学)

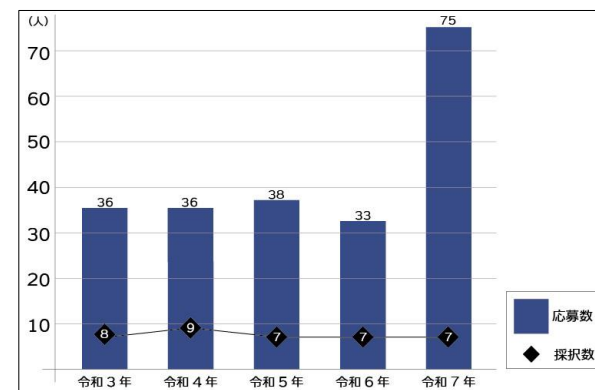
Aksana Ismailbekova

(ライプニッツ現代東洋研究センター、政治学)

※公募により外国人研究員を招へい

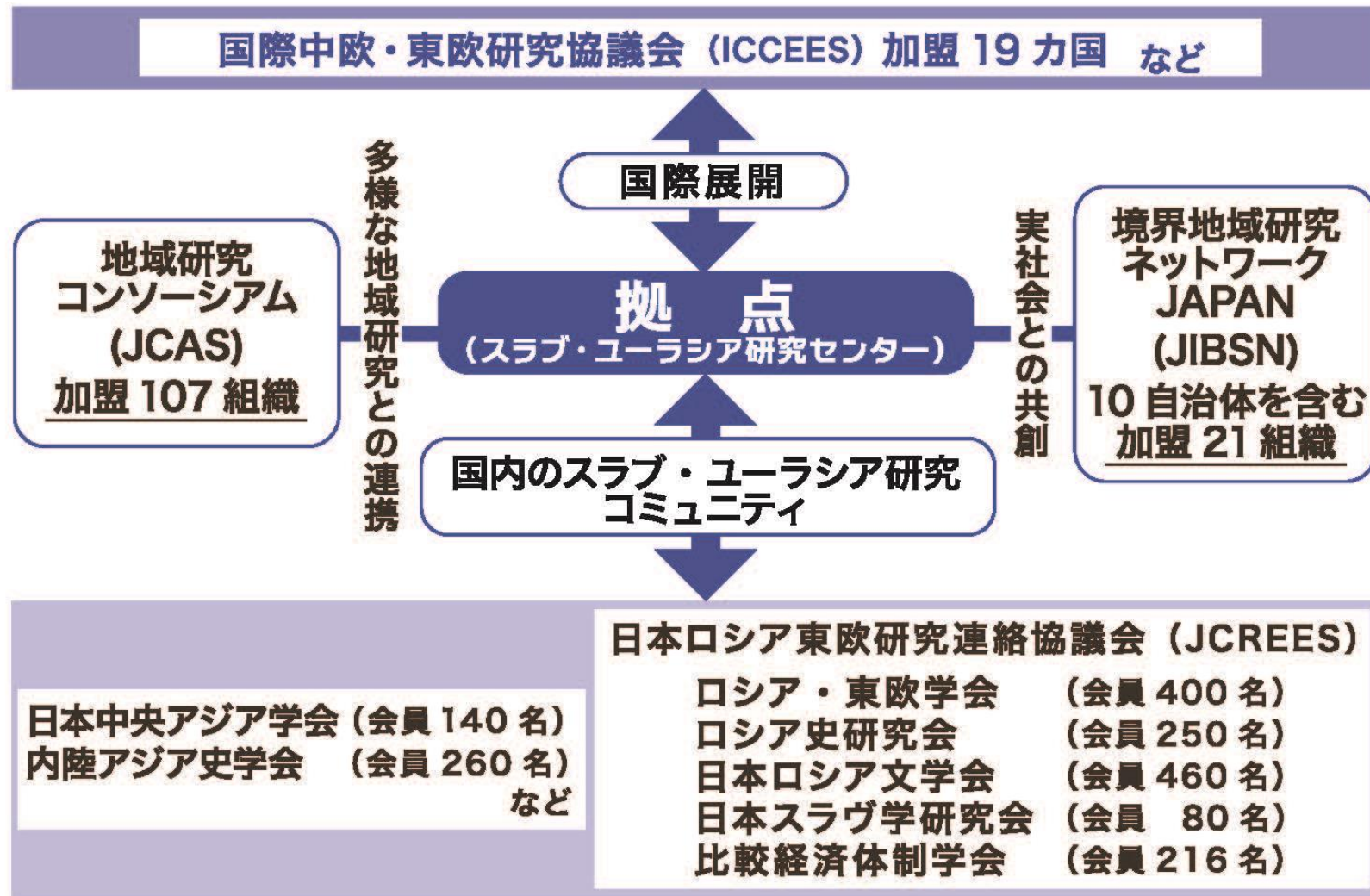
R3年からR7年まで応募218名のうち38名採用 (採択率17.4%)

国際的に活躍する研究者の公募による招へい



スラブ研の研究活動：学内外との連携及び共同研究 ①

関連研究分野及び研究コミュニティの発展への貢献

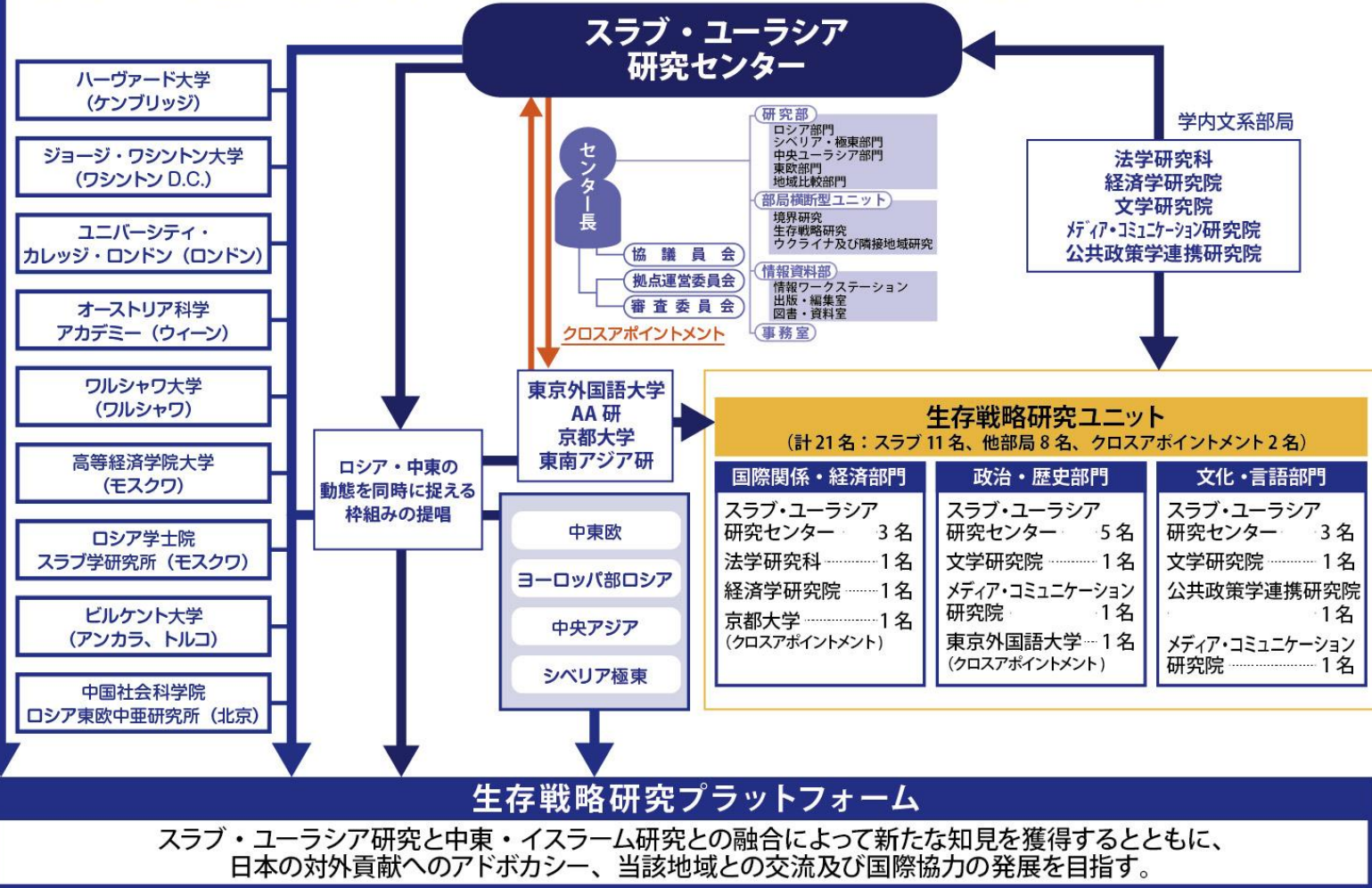


スラブ研の研究活動：学内外との連携及び共同研究 ②

「長い20世紀の終焉」という歴史的転換期

- ・ 1870年代以来の欧米中心の世界秩序（民主主義、人権、多文化主義、自由貿易、グローバリゼーション）
- ・ 欧米中核部の疲弊、世界秩序の周縁にあった中露などの台頭

国際舞台における課題解決の複雑化に対応し、敗者を生まない国際秩序を展望するための確かな知識を構築することが急務



ウクライナ及び隣接地域研究ユニット

ユニット構成員 (7 名)

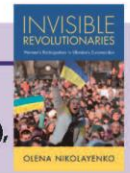
国際アドバイザリーボード (4 名)

- Yuliya Ilchuk (スタンフォード大学)
- Michael Alexander Moser (ウィーン大学)
- Olena Nikolayenko (フォーダム大学)
- Serhii Plokhii (ハーバード大学)

- ・ ウクライナ図書コレクションの整備
- ・ ウクライナ語史を専門とする特任助教を採用
Ihor Datsenko (2025 年度～)
- ・ 外国人招へい研究員制度：ウクライナ研究専門家の招聘
Mykola Yuri Riabchuk (2023 年度)
Olena Nikolayenko (2024 年度)
Olena Palko (2025 年度)

スラブ研滞滞時に執筆した書籍の出版

Olena Nikolayenko
Invisible Revolutionaries Women's Participation in Ukraine's Euromaidan (Series: Cambridge Studies in Contentious Politics), April 2025



- ・ 主催・共済学術イベント
2025年度北海道大学—メルボルン大学合同研究ワークショップ
“War, Migration, and Identity: Exploring New Agendas for Ukrainian Studies in the Asia-Pacific Region”
(2025年12月8-9日 University of Melbourne)
- ・ 社会的アウトリーチ活動
講演シリーズ「危機を生きるウクライナ世界」10回
(～2025年11月30日)



スラブ研の社会的貢献

JIBSNセミナー・ボーダーツーリズム



境界地域（稚内・礼文・根室・標津・竹富・五島・与那国・対馬・小笠原）の首長はじめ約90人が一堂に会し、離島ならではのリスク対応など現地の取り組みについて意見交換された。（2025年10月25日対馬）

境界地域の課題・リスク考える



境界地域において一定のニュースバリューを確立している。またセミナー開催にあわせてボーダーツーリズム（JIBSNプラス）を実施している。（2024年10月12・13日与那国）

- ・境界地域の自治体を糾合した研究と実務をつなぐネットワーク運営
（境界地域ネットワークJAPAN:JIBSN 2011年設立。代表：小笠原村）
- ・北海道大学総合博物館を通じた研究成果の社会発信

北海道大学総合博物館×境界研究ユニットなど



グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」（2009-2013）を契機に、本学の人文・社会系部局及び総合博物館を横断する境界研究ユニット（UBRJ）を設置。博物館にてボーダーツーリズムの常設展を設けている。

博物館 入館者数 (人)	R4年度	R5年度	R6年度
	186,430	171,968	251,738



2024年夏季企画展ではスラブ諸語とその文字に焦点を当てた展示を実施し、あわせて市民向けセミナー「文字を通して見るスラブ人の世界」も実施した。（2024年7月5日-9月29日）

公開講座（1986～）

一般市民を対象とした公開講座を開講。共通テーマでスラブ研や学外講師が講義を担当。毎年50～100名程度の市民が参加。

過去の公開講座

- 2025年 「トランプ2.0時代のユーラシア」
- 2024年 「シルクロード交差する時間・空間・ディシプリン」
- 2023年 「どうなる？ どうする？ 日露関係」
- 2022年 「溶解する帝国—ロシア帝国崩壊を境界地域から考える」
- 2021年 「メロドラマするロシア：アジアとの比較から考える大衆文化の想像力」
（2020年 コロナ禍のため休止）



公開講演会（2012～）

専任研究員の最新の研究内容やスラブ・ユーラシア地域の最新事情を、市民・学生・ジャーナリストなど一般に向け広く情報発信。年4回程度開催。

過去の公開講演会

- 2025年 9月 第55回 シベリアの先住民チュクチ人のことばを追って（呉人徳司）
- 2025年 9月 第54回 植民地化と近代化のはざままで：クルグズ社会にみる部族秩序・権力・社会変容（1860年代～1930年代）
（ベクトルスノフ・ミルラン）
- 2025年 6月 第53回 気候変動・疫病・戦争：アフロ・ユーラシアからの「14世紀の危機」（諫早庸一）
- 2025年 3月 第52回 カザフ・ハン国の歴史 15世紀から20世紀まで（野田 仁）
- 2024年 12月 第51回 中央ユーラシアの「脱植民地化」：ロシア革命期からウクライナ戦争期まで（宇山智彦）
- 2024年 9月 第50回 ハルビンの物語—ひとつの終章（ウルフ・ディビッド）
- 2024年 6月 第49回 国際関係から考えるマケドニア標準語形成史：特にソ連の言語学者に注目して（野町素己）
- 2023年 3月 第48回 発掘調査で探るシルクロードの都市と文化（村上 智児）



西アジアにおいては、アルプスの年輪データから（図上）1260年代末～80年代に顕著な寒冷化が見られる。1280年代はモンゴル帝国の複数の政体 불안定化する時期であり、太陽活動が減退する「ウォルフ極小期」の開始時期とも重なる。ただし、この時期の中央アジアは例外的に高温多湿であった（図下）。



北海道大学

ヨーロッパ帝国による遊牧民の強制近代化とその帰結

遊牧民の主体性の再評価(1920～1930年代)

人間文化研究機構/北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター
「東ユーラシア研究」プロジェクト

特任助教 ベクトゥルスノフ ミルラン

2025年12月12日

自己紹介

氏名 : Mirlan Bektursunov (ミルラン ベクトウルスノフ)

専門分野 : 中央アジア近現代史

出身 : クルグズ共和国 (※キルギス)

日本での暮らし : 2014年10月～現在に至る

教育 :

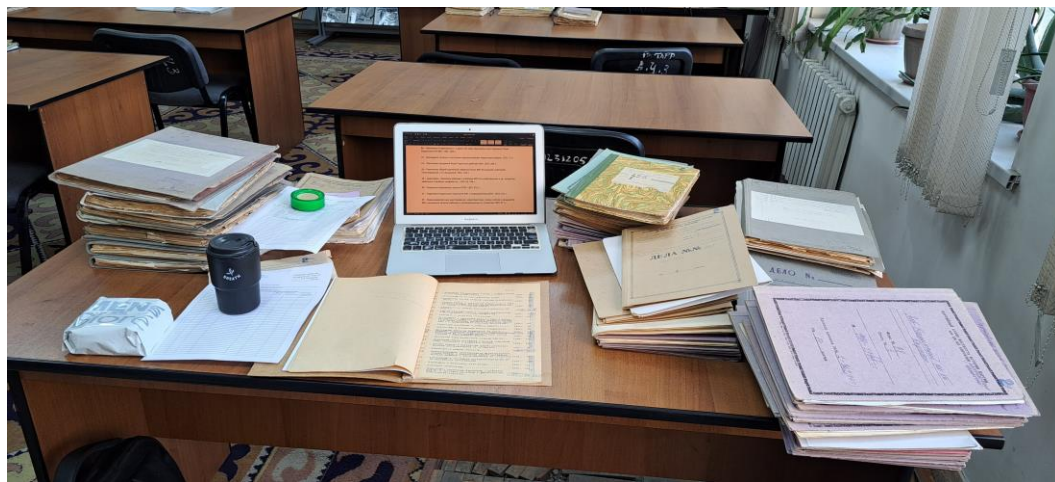
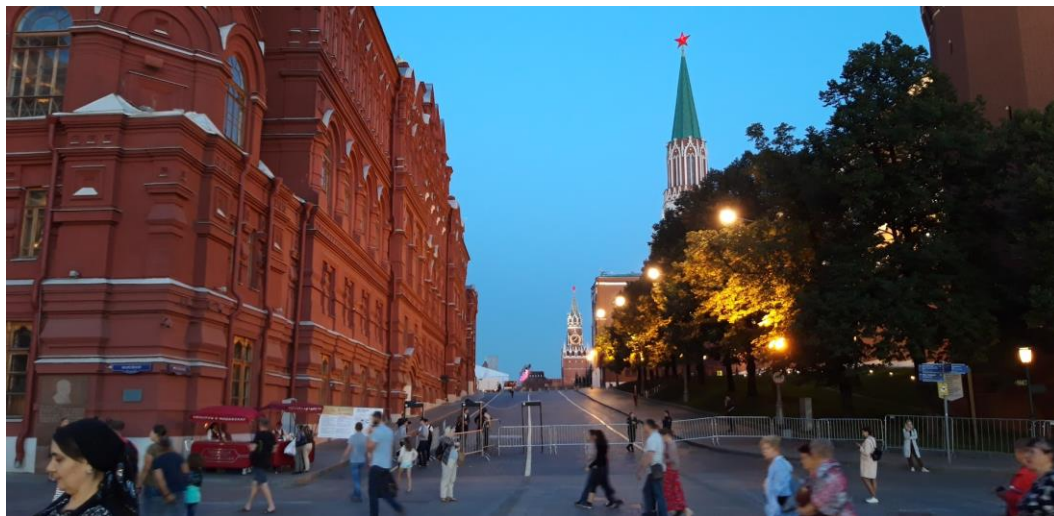
- ビシケク国立大学 (B.A.)
- 北海道大学 (M.A.)
- 北海道大学 (Ph.D.)

経歴 :

- ビシケク国立大学 (2013年～14) ・特別教師
- 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター (2022年～2024年) ・非常勤研究員
- 日本学術振興会/京都大学 (2024年～2025年) ・外国人特別研究員
- 人間文化研究機構/北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター (2025年4月～) ・特任助教



私の研究への道



【中央アジア史、クルグズ人の歴史を研究しに・・・札幌へ】

・外国での修士課程を希望

Central European Universityか日本かで迷う

・奨学金の確保

MEXT(文部科学省)の奨学金を獲得＝中央ユーラシア地域に関する日本の研究水準の高さ

・中央アジア、ロシア・日本の架け橋

修士2年目から毎年海外調査を実施、2020年まで主にロシア、クルグズスタン、カザフスタン



北海道大学

私の研究＝中央アジアの近現代史



【中央アジアとは】

・中世末・近世

ブハラ・ハン国、ヒヴァ・ハン国、カザフ・ハン国、コーカンド・ハン国など中央アジア国家形態の形成期

・19世紀初頭

ロシア帝国の侵入、中央アジア諸ハン国の衰退

・1924年

ソ連の管轄下で近代民族国家の形成

・1991年

ソ連の崩壊と中央アジア諸共和国の独立

クルグズ人とは



(カラ)キルギス人
イシ・ムラット



(カラ)キルギス人
クズリャル・アイ

1. 中央アジアに暮らすテュルク系民族の一つ
 - 1897年の人口調査ではおよそ60万人弱(ロシア領中央アジア内)
 - 言葉がクルグズ語(テュルク語族のクプチャク語群に属する)
 - 20世紀初頭までは遊牧を基盤とし、部族社会を構成

クルグズ遊牧社会の部族構成

- ・ **40の部族郡が存在** ⇨ 様々な影響力のある部族から成る
- ・ **部族のリーダー**：「バートウル」「ビイ」「マナプ」として名付けられた
- ・ **部族の構成**：リーダーが属する有力な家族、彼らと血縁関係にある他の家族（2～4世代まで）、血縁関係を持たない氏族（ブカラ）
- ・ **流動性の高い遊牧経済社会**：リーダーに成りえることも、リーダーから降りることも可



なぜ、いま遊牧社会が重要か



現在のNaryn州のクルグズ人

【ダブル忘却：ソ連、そして国民国家】

- ・ **ソ連期**：遊牧社会を「過去の有害な遺産」とみなし、強制定住化を推進。その結果、近代化の名のもとに遊牧民が持つ知識体系は犠牲となった。
- ・ **クルグズスタン独立期**：遊牧社会は象徴的にのみ保存され、その実質的内容は忘却された。国家は近代化（消費主義・発展主義）へと急速に向かった。
- ・ **では、遊牧社会とは何か？** それは「自然と社会のバランスを保ちながら、社会の成長を図る」ための総合的なシステム→現在で言う「**持続可能な開発**」

写真：Chieko Hirota (Slavic-Eurasian Research Center, Hokkaido University)

出典：Hammer E. The Archaeology of Pastoralism, Mobility, and Society: Beyond the Grass Paradigm. Cambridge University Press; 2025; A. Khazanov, Nomads and Outside World (Cambridge: Cambridge University press, 1984.)



北海道大学



ソヴィエト政権の下で出版された初めてのクルグズ後での新聞「エルキン・トー」、1926年

ソ連初期：選択肢のない近代化の始まり

1. 現地人による自治の試み：1917年のコーカンド自治、1917年–1918年アラシュ党、1922年山岳州の試み
2. 中央アジア諸民族：選択肢のない政治環境でのボリシェヴィキ党への入党・ソヴィエト政権運営に参加
3. 1924年中央アジア・共和国境界確定：クルグズ自治ソヴィエト社会主義共和国の設立
4. 民族自決権の魅力：ソヴィエト民族政策に一定の期待があったが、概ね不信感の方が高かった
5. 1920年代：クルグズ人エリートによるソヴィエト政権の批判「**共産党** 党員証を持った植民地主義者」
6. 1930年代：現地人による公的抵抗の終わり・スターリン大粛清



近代化のコストは？遊牧民から農民を

Alai-Gulcho 地 (※平均標高 2500 メートル)

Year	1928	1934
Sowing area	7452 ha	32 000 ha

At-Bashy 地 (※平均標高 2500 メートル)

Year	1930	1935
Sowing area	5900 ha	15 220 ha

Kyrgyz Soviet Republic (農地面積は 2 倍以上 UP)

Year	1929	1934
Sowing area	417, 000 ha	970, 000 ha

家庭レベルでの農地の拡大 (平均)

Year	1929	1934
Sowing area	0.5 ha – 2.5 ha	7-8 ha

1. 1929年：集団化の開始
2. 1931年：定住化の開始・遊牧の禁止
3. 重要なポイント：集団化は家畜生産ではなく穀物生産を中心に→**農地面積が5年間で2倍以上に。牧場は放置、衰退状態**
4. 短期結果：**家畜の減少80%**（8.2百万頭→1.4百万頭）
5. ソ連時代：「近代化」「開発」の言説を乗り越え、よりニュアンスのある社会経済史



数字で見る定住化と集団化

Table 1. Realization sedentarization program for 1931–1934 years.

Year	Plan for settling	Actual settled number of households
1931	10 000	9830
1932	30 000	33 520
1933	22 000	1000
1934	23 000	1000
Total	85 000	45 350

定住化の過程1931-1934

家畜数の変動1916-1956

Table 3. Livestock numbers for 1916–1956 years (thousands of heads).⁶⁸⁴

	1916	1929	1935	1941	1951	1956
Cattle	519	-	316	556	662	726
Cows	188	-	131	222	222	242
Sheep and goats	2,544	-	967	2,529	4,515	5,343
Horses	708	-	278	408	495	347
Total	3,959	8,191 ⁶⁸⁵	1,692	3,712	5,894	6,658

「Nomadic Socialism」：形は社会主義、中身は遊牧民の価値観



現在のNaryn州の牧場

写真: Chieko Hirota (Slavic-Eurasian Research Center, Hokkaido University)

1. クルグズスタンの地理的特徴：

- 山国で、平均標高は1500メートル以上で、大半は農地に適していない

2. 遊牧経済の再開：

- ソ連が1930年代末から遊牧を許可、「ソヴィエト的遊牧」の始まり・**遊牧経済社会の知恵を推奨**、畜産に重点、家畜数が1960年代に回復

3. 農場集団が部族を中心に

- 部族ごとに畑を耕し、部族ごとに家畜を育成

4. 共存と収束

- クルグズ遊牧文化とソヴィエト国家の社会主義的イデオロギーが縋い交ぜの状態、**その中における遊牧民の主体性**



まとめ

- **ソ連期**：「後進した遊牧民を定住化させ、近代化させた」という言説が定着し、現在に至るまで無批判的に繰り返されている
- **現代**：国民国家を目指す現在のクルグズスタンでも遊牧社会の多くの要素が忘却される（部族要素、自然・社会に対する価値観）
- **本研究**は、歴史的アクターとしての遊牧民の視点に立ち、外部アクターによって彼らの名前で語られてきた「近代化」の歴史を研究（部族要素の水面下での存続・忘却された近代化のコストを明らかにし、客観性のある歴史観を提示）
- **ソ連期の近代化の評価**：ソ連周縁にとっての問題は、近代化したかどうかではなく、自らの近代性を語る権利を奪われていたことである

